
【APH】パズル

金木犀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【APH】パズル

【Zコード】

Z2082X

【作者名】

金木犀

【あらすじ】

平和な街・ルーカスに住む青年アルフレッドはある日、知り合いの王耀に頼まれて街の奥の森を訪れる。

その森の中で見つけた大きな屋敷に入ったアルフレッドは漆黒の髪と瞳を持つ引きこもり青年の本田菊と出会う。

少し謎めいている菊と共にアルフレッドはルーカスで起る不可解な事件に巻き込まれていく……

Episode 1 (前書き)

新連載だぜイエー
くだらないぜイエー

といつわけでの小説は菊とアルフレッドが主人公?です

どうか生暖かい田で見てください.....

Episode 1

世界のどこにあると言われる街・ルーカス
この街は面積が広く大都市であるにもかかわらず今まで一度も事件
がないというとても平和な街であった
街には金髪の人や黒髪の人がありと様々な国の人間が住んでいて
みな差別なく仲良く暮らしていた

そしてその街の中心にある通り、リーガル通りのある青年が歩いて
いた

青年はぴょんとはねたアホ毛が生えた金髪に青い瞳でメガネをかけ、
服の上に茶色のジャケットを羽織っていた

紙のカップに入ったコーラをストローですすりながら青年は退屈そ
うに空を眺めていた

「あー、もう平和過ぎて退屈なんだぞ…………」

青年の名はアルフレッド・F・ジョーンズ

街で一番の金持ち、カーブランド家に居候している普通の青年だった

「アーサーは疲れてるからってからかってもおもしろい反応してくれ
ないしフランスも鏡見てばっかりでかまってくれないし……
あーもうなんなんだよ！！」

アルフレッドは飲み終えた紙のカップをごみ箱に投げて叫ぶ

紙のカップは見事にごみ箱に入れられた

「お、さつすが俺なんだぞ！」

アルフレッドはついでに箱を覗く

「『』み箱覗いてなにやつてあるか……つたく

「あ、耀^{ヤオ}じゃないか。なんで『』にいるんだい？」

アルフレッドに声をかけたのは黒髪を一つに束ねた童顔の青年、王^{ワシ}耀^{ヤオ}だつた

「たまたま通りかかつただけある。でもこの時期にお前が外出なんて珍しいあるな、変なものでも食べたあるか？」

今は冬。アルフレッドは冬がとてもなく苦手であり冬の時期にはずっと家に引きこもりゲームしたり、寝たり、ゲームしたりと不規則すぎる生活を毎年している

今日だつて凍えるような寒さでアルフレッドじやなくとも家に引きこもりたくなるような日だ

「だつてゲームも全クリしかやつたしアーサーもフランシスもまつてくれないから退屈だつたんだぞ」

「じゃあまたゲーム買^{アツ}えばいいんじやないあるか？」

「お金がないんだぞ」

「はあ！？お前、金持ちの家に居候してんじやねーあるかー金に困る方が難しいあるー」

「アーサーはケチだからお金くれないんだぞ。ひどいんだぞ、自分

だけ裕福な人間になりやがつて

「まあまああいつらしきつりやありしこあるな」

耀が困ったように肩をすくめる

そしてやがて何かに気付いたようにアルフレッドを見つめた

「な、なんだい？」

「お前…………今暇あるか？」「

耀はやけに真剣な顔で聞いてくる

「え、な」

「ひ・ま・あ・る・か！？」

「えと…………まあ暇つちやあ暇…………といつか退屈なんだぞ。」「

アルフレッドに詰め寄つた耀はアルフレッドの答えを聞いた途端に表情が明るくなつた

「そうあるか……じゃあ安心あるー。」

耀はどうからかカゴを取り出しアルフレッドに渡す

「え、な、なんだい！？」

「今から言つ場所にこのカゴに入つていい物を届けて欲しいある

「え？ ちよ」

「『』の街の奥にある森は知つてゐるな？ その森に入つて左に曲がつてしまふく歩いていた右に歩いていてそれから……」

「ああああーーもつーーとりあえず森に入ればわかるんだぞー・じゃ、いつてくるんだぞーー」

「あ、待つあるーーその森は…………」

しかし耀が呼び止めた時にはアルフレッドの姿はなかつた

街の奥にある森は『名もなき森』と呼ばれており入つた人は必ず迷うため人々からは避けられていた
そんな森に耀はなんのようだつたのだろうかと疑問に思いながらアルフレッドは森を進んでいた

「ていうか耀に『』に行けばいいのか聞くの忘れちゃつたんだぞ……

……

それは自分が悪いんじや……

「うー、めんどくさいけど耀の所に戻つて聞いてくるんだぞ…………」

アルフレッドは弓を返そつと後ろを向き走つた。

「あれ…………？」

しばらく走つてから足をとめてアルフレッドは首を傾げた。確かに森に入つてから真つ直ぐに歩いてきたはずなのにどんなに走つても森の入口に辿り着けないのだ

走つても走つても景色はたくさんある木々ばかり

「ど、どうこう」とだい…………？迷わないよついに真つ直ぐ歩いてきたつていうの…………」

ぶつぶつ文句を言いながらアルフレッドは森を歩いていく。
そしてアルフレッドの田にある物がうつった

「…………屋敷？」

森にはとても大きい和風な屋敷が建つていた
塀で囲まれたその屋敷の前にアルフレッドは歩いて行く

「なんでこんなところに屋敷があるんだい？」

門の前に立ちアルフレッドは軽く木できた丈夫そうな扉を押してみた
扉は簡単に音を立てて開き玄関への道が現れた

アルフレッドは興味が湧いてきてそのまま敷地内に足を踏み入れる。

いわゆる不法侵入というやつだ
しかしそんな言葉を知りもしないアルフレッドはワクワクした表情
で玄関の戸に手をかける
そこでアルフレッドはふと幼い頃にアーサーに言われたことを思い
出す

『いいかアルフレッド。人の家に入るときはな、必ずインター ホン
を押すかノックをしなきゃいけないんだ』

『なんでだい？ そんなのめんどくさいじゃないか』

『めんどくさいともだ。』

勝手に家にあがりこんだらその家の人に失礼だろ？だから……』

『なんかよくわかんないからとりあえず失礼じゃないように入れば
いいんだね？』

『え、いやそうじゃなくて……』

『フランシス、おやつー』

『あ、ちよつ……』

アルフレッドにとっては別に思い出しても何も得しないことだった

アルフレッドはアーサーが言つた正しいことをきれいさっぱり忘れておりアルフレッドは『人の家に勝手に入るときはとりあえず失礼じやない』ように『正しい』と思つてゐる

「んじゃ、行くんだぞ！」

アルフレッドは戸を開けた

「じめんぐーださーい！！」

アルフレッドの声が屋敷の中に響き渡り、やがて消えた
屋敷からは物音一つせず誰もいないうだつた

「なんだ、誰も住んでないのか…………」

アルフレッドはそのまま家に上がり廊下を歩く

誰も住んでいないにしては家の中はきれいだ

「……この家は俺の住んでる家と作りも見た目も全然違うな…………
この前アーサーに聞いた和風スタイル？ついづやつかな？」

アルフレッドの家とは違いほとんどが木でできているため歩くたび
に床は軋み、音を出す

ルーカスには様々な国の人々が住んでいるため家も様々な種類がある
がこういう種類の家は少なく、珍しい
アルフレッドも始めて入ったようだ

興味津々でアルフレッドは家中を見学する。
そしてアルフレッドはふとある物が目に入った

障子で閉じられた部屋だった。

障子を少しだけ開け、中を覗いてみると部屋の中は真っ暗で何も見えない

「なんだい……全く日光が入っていないじゃないか……」

そう行つてアルフレッドは部屋の中に入る

障子の隙間から光が入つてくるから部屋の中が見えないこともない

「…………へ？」

アルフレッドは思わず変な声を出してしまった。

部屋の畳の上になんか塊が転がっていた

なんか布団を巻いたような……

「な、なんだいこれ…………？」

アルフレッドはしゃがんでその塊にちょん、と触つてみると
塊はびくっと微かに動いた

「わ、わ！？う、動いた！？布団なのに！？」

アルフレッドはパニクつて部屋を走り回る
そして塊につまづいて口ケる

「いたたたた……なんなんだよ！）の塊は……」

「いたた……こ、腰が……」

「…………？」

アルフレッドは塊がしゃべったのに驚き、後ずさつた

理解できない出来事の連続にアルフレッドは目眩がする
そしてさつきまで横たわっていた塊（布団の）が一人でに起き
上がったことによりアルフレッドの脳は機能停止一歩前になる

「な、な…………？」

布団の塊は立ち上がったと同時にぐるぐる巻きだった布団が床に落ちた

塊の中から姿を現したのは…………

「…………は？」

漆黒の髪と瞳を持つ美しい青年だった。

Episode 1 (後書き)

できれば感想をお願いいたします。人（＊、＊）

Episode 2 (前編)

短いです

短すぎます

まあ今更何がどうです

布団から出てきた青年は何も言わずマルフレッドを見下ろした

「え、な…………？」

青年は腰にさした刀を鞘から抜きゅうくつと口を開いた

「何者だ」

「え、俺は…………」

しゃべりだしたマルフレッドの首に刀が向けられた

「あ…………」

マルフレッドはしゃべるのをやめ青年の顔を見た
青年は綺麗な漆黒な瞳でマルフレッドを見ていた。
光のない、冷たい瞳で

「ち、違うんだー俺は…………！」

「質問に答えてください、そもそもなれば…………」

青年は刀の峰をマルフレッドの首に当てる
冷たい感触がマルフレッドの全身を麻痺させた

「あなたの命はありません」

青年が突き放すよつに言つた後、アルフレッドは田の前が真つ暗になつた

「ん…………？」

アルフレッドは田を覚ました。
どうやらあの時氣絶してしまつたらしく

「…………」

「あ、おはよー」やいいます」

アルフレッドが寝ていた部屋の襖が開きある人物が現れた

それはさつきの青年だった

「あ、え、その…………」

「先程は申し訳ございません。知らない方だったので……」

青年はやれりと/orは別人のように礼儀正しくアルフレッドに謝る

「いや、俺も勝手に入っちゃったし……」

まあもともと悪いのはアルフレッドだ。
だからアルフレッドも謝る

「問い合わせたりきなり氣絶するので驚きました……何者かも
わからないのに殺すかどうかと迷っていた所、あなたがこれを持っ
ているのに気付きました……」

そう言いながら青年は先程、耀に渡されたカゴだった

「それは耀に渡された……」

「やはり耀さんの知り合いでしたが、これがなかつたら罪のない人
を殺めてしまつていました……」

青年は安堵したように息を吐いた

アルフレッドも青年が優しい人だと気付き安心した

「君は耀とどんな関係なんだい？」

「やれり、ですね…………古い知り合いとでも言つておきましょうか」

「そのカゴの中身は？」

「ああ、食材です。耀さんがいつも持つてきてくれるんです」

そう言い青年は静かに笑う

青年は見た目は自分より年下に見えるがとても大人びている
とても一緒にいて落ち着いた

「あ、俺アルフレッド・F・ジョーンズって言つんだぞ！…」

「アルフレッドさんですか……いい名前ですね」

青年はまた笑つた

「君はなんていうんだい？」

「私、ですか？」

アルフレッドは青年の田つきがいきなり変わった気がした
なんか今自分が言つた言葉をずっと待つっていたような……

そしと青年は立ち上がりて言つた

「私の名前は本田菊と申します。職業は……探偵です！」

「…………は？」

アルフレッドはしばらく何も言えなかつた

Episode 3

俺は菊の血口紹介を聞いた後、耳を疑つた

い、今何て？

探偵？

Why?

「まあ普通に戸惑いますよね……」

菊は苦笑しながらまた座つた

俺、探偵初めて見たんだぞ……

「珍しいですよね、探偵なんて」

まるで俺の心を覗き込んだよつて俺が思つたことを菊は呟く

「だつて探偵つて警察と一緒にみたいなもんだし、あと」

「こんな平和な街に探偵や警察がいたつて何の意味もない、と言いたいんですね」

ま、また心読まれた……

超能力者か何なのかい？

「まあその通りですね。この街にはまったく起じませんよね。」

ずっと笑顔で話していた菊の顔が変わったのはここからだった

「そり、田立った事件は……」

「え？」

俺は聞き返してしまった。

言葉の意味が理解できなかつたからだ

しかし菊はそのまましゃべり続ける

「アルフレッドさんは自分の街のこと、よく知っていますか？」

「え、いや」

「そういえば街のことはよく知らない。知りうともしていない

「ですよね。でも……」

菊は目を細めて、小ねこ声で呟いた。小ねこ声でも近くにいた俺にはしつかり聞こえた

「知らない方がいいかもされませんね……」

菊はじつひと言つた。

悲しそう。

「菊…………？」

菊の顔を見る。菊の顔はさつき俺に刀を向けた時と同じ顔だった。

光りのない闇に染まった瞳、感情がないようになまったく動かない表情。

俺はなんといふか…………」の菊は苦手だ。理由はよくわかんないけどなんか嫌だ

わざとまでの菊に戻つてほしい、俺は口には出せないが心の中での言葉を何回も繰り返した

その声が菊に届いたのか菊は笑顔に戻り

「お茶入れてきますね」

と、部屋を出て行った

菊が出て行った後、俺は体中の酸素を吐き出し布団に倒れ込んだ
ああいう状況は苦手だ、それは小さいころからそうだった
小さい時にアーサーとフランシスが当時の俺には理解できない真面目な話をしている時だってなんか落ち着かなかつたし

そんなことを思い出しても菊がお茶を持って戻ってきた

「おー、このお茶始めてみるんだぞ」

「こつては緑茶と行つて私の国で飲まれてゐる飲み物です」

「こつただきまーすー！」

喉が乾いていた俺は緑茶とこつむ茶を一気に飲む

「あ、でもそれ苦いんです」

「ふふうううううううう！」

「.....」

俺は緑茶のまま固まつていてしまつた

菊は笑顔のまま固まつていてる。

「まあ、やぬとは思いましたが…………」こつまで盛大に吹くとは…………

「こつめんーでも本当に苦くて…………」

あの飲んだ瞬間に口の中にはがつたといつもない苦みは一生忘れない自信があるんだぞ！

「でも健康にいいんですよ、緑茶」

「いやいやいや……そんなの飲んでたらいつか死ぬよー？吐くよー？」

「あなたは吹きましたけどね」

菊は冷めた表情で部屋に飛び散ったお茶を見る。
うわ絶対気にしてるよどうしよう

「「」の緑茶、みんなさんが苦いといって飲まないため私が改良して飲みやすくしたんですが……」

「「」がだい！？もとより10倍くらいになってるんじゃないかい！？」

「そうですか？」

菊は首を傾げて、自分の分の緑茶を飲んだ
ちなみに俺は緑茶を飲んでから0・5秒で吹いた
軽く白髪だ

「私はちゅうどいですけど…………」

「君の舌おかしいよー。」

菊はいきなり俺を見てくすくすと笑った

「な、なんだい？」

「いえ…………こんなに楽しく会話するの久しぶりで…………」

「久しぶり？」

「ええ、最近ずっと人と会つてなかつたので
ずっと？」

それついでのくらー……

菊はそれで寂しくなかつたのかな?

「あ、もうこんな時間ですね。」

菊が外を見て言つた。

外はもう真っ暗になつていた

「えー? もうこんなに暗く…………」

俺がこの家に来たのは確か午前くらいたの…………

「アルフレッドさん、ずっと氣絶されていましたので…………

「じ、じのくらー?」

「5時間くらいですかね?」

「あ、そんなこー?」

部屋にある時計を見るともう5時だ。

やばーーー! サーバーに怒られるー。

「途中まで送ります。もつ夜ですし森に迷わなことひー…………

「あ、あつがヒー!」

「こ'え」

菊は棒みたいな物を腰にさした

家を出るとただでさえ夜は暗いのに森の木々のせいでの辺りは真っ暗で何も見えない状態だった。

「うーわ、真っ暗だ。ライトか何かを……」

「ダメです」

「え? なんで」

「光があると私達の居場所がわかつてしまします」

菊は森を眺めている

「な、誰に?」

俺は菊の言つてることがよくわからず菊に問い合わせた。

菊は俺の質問に答へず俺の手を握った

「え、何……」

「走りますよ」

菊が腰の棒から何かを抜いた

それは鋭い刃がついた刀だった

「絶対に私の手を離さないでください」

「ちよつ…………――?」

俺の返事を聞かずに菊は走りはじめた
まあ手を握られてるから俺も走らなきゃいけないんだが
真っ暗で何も見えないが周りの景色が流れていくのを俺は体で感じ
ていた

菊はスピードを落とすことなく全速力で走り続ける
俺もそれに一生懸命ついていく
体に冷たい冬の風が当たつて痛い

「あ、菊……スピード……とわあっ……」

菊は急にスピードを落として止まつた
しかし俺は止まれなくてそのまま転んだ

「だ、大丈夫ですか？」

菊が差し延べた手をとつて俺は立ち上がる
枯れ葉がクッショնになつてくれて怪我しなかつたが転んだらそり
やあ痛い

「いたた……も、もういいのかい？」

「はい、もう出口なので」
「で、出口? もう?」

確かに田の前には街の風景が広がっていた。

この森は山の上だから街の夜景がとても堪能できる

「あ、あつがい。来るとも迷ったから」

「いえ。もしよければまたいらしてください」

「いいのかいー?」

「はー、こいつでも」

俺は森から出た。

でも菊は一步も森から外に出ようとしない

でも俺はそんなこと気にしてないで菊に手を振り山を降りていった

「また来る、ですか……でも……」

菊は空を見上げる

「こつかは…………私のもとからになくなってしまったのでしょ、いへ」

そういう菊の瞳はとても悲しそうだった

Episode 3 (後書き)

感想お願いします！！

Episode 4 (前書き)

私は文章を書くのが本当に下手すぎるんです

「た、ただいま……」

俺は大きな玄関を少しだけ開け中を覗き込んだ
中は真っ暗だった。

アーサーとフランシスはもう寝たらしい。

アーサーに絶対怒られるかと思つてたからアーサーが寝てる」と
気づき俺は安心した

なるべく音を立てないように中に入り忍び足でリビングに向かう
リビングにつき上着を脱ぎ捨てソファーに倒れ込む

「ああー怒鳴られるかと思つてたから…………よかつたんだぞー」

俺はため息をつく

「つたくアーサーはいつもガニガニつるをこだわー
クソ眉毛が……」

「だあれがクソ眉毛だつてえ??」

「……!?」

真っ暗だった部屋が突然明るくなり聞き覚えのある声が聞こえた。

「ア、アーサー……」

リビングの入口に立っていたのはボサボサの金髪のエメラルドグリーンの瞳を持つこの家の主、アーサー・カークランドだった。母と父が早くに亡くなり、若くしてこのカーランド家の当主となつた男だ。

人がいいのか一人が寂しいのかこの家に俺とフランシスを居候させてくれている。

「今何時だと思つてんだ！…ビ！」行つてた！…

「だ、だつて……」

「ちやんと聞え！…」

アーサーに怒鳴られ仕方なく今日あつたことを話す

「さ、散歩してたら耀に会つて…………頼み事されたから街の奥の森に行つたんだ」

「おまつ…………『おもなき森』に行つたのかー？」

「え、うん」

街の奥の森、と俺がその言葉を口した途端アーサーの表情が変わった。何があるのだろうか？

「迷つただろ？」

「んー、まあね。で困つてたら和風スタイルな大きい屋敷を見つけたから中に入つたんだ」

「屋敷……？」

「で中で本田菊つて人と知り合つたんだ。友達になつたんだぞ……」

「え…………く…………？」

菊の名前を聞いた途端アーサーは目を見開いた

「お前つ……菊に会つたのか！……？」

アーサーが声を大きくして俺に聞いてくる

「う、うん……アーサー知り合いなのかい？」

「つ…………」

アーサーは顔を歪め、そっぽを向いた

「いや…………別に…………」

「? そつか」

さつきからアーサーの様子がおかしい
俺、なんか変なこと言つたかな？

「おいおいお前達、夜に大きな声出すなつつの」

「フランシス！？お前起きてたのか！？」

「あんな大きな声で話してたら起きるって。近所迷惑だぞ」

肩をすくめながらリビングに入ってきたのはこの家の居候その2の
フランシス・ボヌフォワだ。

ウェーブがかった金髪、青い瞳に額に鬚をはやしたふつちやけ言つ
とナルシストな奴なんだぞ。

ちなみにアーサーとは仲がめちゃくちゃ悪いんだぞ

「何そんなに言こ争つてるわけ？お兄さんにも聞かせて？」

「言こ争つてなんかねえよ…………」

チツ、ヒアーサーは短く舌打ちをして俺の方を見た。

「アルフレッド、お前はもう寝ろ」

「え、なんで」

「子供^{ガキ}は早く寝ろ、つてことだ」

「なんだとあつ……？俺だつてもひー9歳なんだぞー？子供扱いし
ないでくれよ……」

「まあまあ明日朝起きるのつらくなるんだから寝とけ寝とけ

フランシスに背中をおされ俺はリビングを追い出された

「な、なんなんだよ一人とも…………」

俺は仕方なく2階にあがつていった

「行つたみたいだね」

「そうだな」

フランシスはアルフレッドが2階にあがつたことを確認するとアーサーの顔を見た

「で、どんな話してたの？」

「アルフレッドが……………今田『名もなき森』に行つたらしく」

「『名もなき森』にか……………？」

「ああ、それで……」

アーサーは下を向いて言つた

「菊に……………本田菊に会つたそつだ」

アーサーが口にした意外な人物の名にフランシスは声を大きくして
聞き返す

「 もう………… 菊に…………？」

「 静かにしろ……アルフレッド」「聞こえるだろー。」

アーサーはフランシスの口をらざぐ

「 わ、悪い………… でもアルフレッドが菊に…………」

「 ああ、菊の家は森の特殊な空間の中にある。その中に入れるのは一部の人間だけだ」「でもアルフレッドは菊の家を見つけだした…………。これは偶然なのか？」

アーサーは目を閉じる。

「 偶然………… だといいけどな…………」

「 うー、なんか眠れないんだぞ…………」

俺は部屋の電気をつけずにベッドに寝つ転がっていた。
夜中なのにまつたく眠かない

「…………ちょっと外の空気を吸つてくれるんだぞ」

そう呟いて俺は部屋を出た

一階に降りたらロビングの電気がまだついていた。アーサーとフランシスはまだ起きているらしい

二人に気付かれないように廊下を歩いて玄関の扉を開けた

「寒つ……マフラーとかしてくればよかつたかな…………」

外は上着だけでは寒さを十分に防げないくらい寒かった。
夜中だからな…………

「うーん、暇だからぶらぶらしてみよう

俺は道を歩き出した。

真夜中だし誰もいないから辺りはとても静かだ
街灯の明かりが真つ暗な道を照らしてくれている

「明日また菊ん家に行こつかな、なんか食べ物とか持つていって……」

「だ、誰かああああああーー助けてくれえええ！」

「…………？」

突然、遠くから男の叫び声が聞こえてきた

アルフレッドはそれに気付き声の主を探すために走り出す

「な、なんだいこんな真夜中にーー酔つ払いかなーー？」

とか言いながらも俺は暗い道を全速力で走る

その時、視界のすみで何かが動いているのに気が付いた。

人だ。

たぶん、さっきの叫び声の男だろう。

男は俺には気付かずに道を転びそうになりながらも必死に走っている

「君ーーちょっと待ってくれよーー真夜中にあんな叫び声あげて……近所迷惑なのがわからないのかいーー？」

まあ自分もそうなのはわかっているが大声で男に声をかけた。
しかし男は気付かず走り続ける

「ちょっと唔…………」

その時、風が吹いた。

自然の風じゃない、誰かが俺の隣を通り過ぎていったのだ。
はやすぎて姿は確認できなかつたがそいつはあの男を追つてゐるのだ
るつ。

なんのために？？

俺はわけもわからぬままそいつらの後を追つた

やがて男は街の真ん中の噴水広場で止まつた。
この噴水広場は家に囲まれていて太陽があまり当たらぬ場所だが
今は月明かりが照らしていて明るくなつてゐる

「つはあ…………はあ…………」

男がやつと止まつてくれたので俺は男に近づこうと家と家の隙間から広場に一步足を踏み入れた

「君、大丈夫かい？何が…………」

その先の言葉は言えなかつた。

突然、俺の前に誰かが上から落ちてきたのだ。落ちてきたつていう

か見事に着地していたが。

俺は驚きのあまり声が出せない。

さつき俺の隣を通り過ぎていった奴にちがいない。

奴は白い着物を着ていて頭にもなんか白くフサフサしたものをつけ
ていた

顔も確認したかったが奴は俺に背を向けていて見えない。

俺は家と家の間の狭い通りに戻り、身を隠した

「う、うわああああああっ！…？」

男が奴に気付き叫び声をあげる
逃げようとしたがあせっていたのか男は足をからませ転んでしまつ
た。

奴は何も言わずに男にゆっくりと近づいていく。

「や、やめひ。来るな」

男が座つたまま震える声で奴に言ひ。

それでも奴は男に近づくのをやめない

とてもなく嫌な予感がした。

俺は男を助けようとしたがなぜだか足が動かない

「ど、どうか命だけは…………」

命?

何を言つてゐるんだ……?

殺されるわけじやあるまいし…………

そつと疑問に思つた後、俺は自分が思つたことをもつて一度思ひ返す

殺される?

つまり…………

死ぬ?

額に冷たい汗が流れた。

やばい、助けなきゃ

そつと思つてゐるのに体は動いてくれない
首すらも動いてくれないから俺はその一人から目が離せない

男の前に奴がやって来た

男は恐怖で顔がすゝいことになつてゐる。不謹慎だが少し笑つてしまつた

奴は何かを手に持つた。

刀だ。

俺は寒気がした。

本当にやばい、あいつ、殺される

奴は刀をふりかざす。
男は目を見開く。

そして奴は、

刀を男に振り下ろした

男の悲痛な叫び声が気持ち悪いくらいに響き渡る。
真っ赤な液体が広場に飛び散る。

俺は声が出せなかつた

初めて見る光景に何も感じられなかつた。

この気持ちはなんなのだろう

何も言えずにいる俺に赤い液体を浴びた奴は振り向いた

奴は変なお面を顔につけていた。

白かつたはずの着物などには赤い模様が出来ていた

月明かりに照らされたあいつはまるで

鬼だった

Episode 5

俺は暗闇の中にいた。

光もないのに自分の姿ははっきりと見える。

「……………」

「誰かー！いないのかーい！？」

大声で読んだが返事はない。誰もいないようだ

「うーん、なんなんだこ……？」

「…………ル…………ッド」

その時、微かに小さな声が俺の耳に届いた

「……………アルフレッド…………！」

その声は自分の名前を呼んでいた。
そしてその声は聞いたことがあった

「アーサー？」

それは俺が居候している家の主、アーサーの声だった。

「アルフレッド……」

「アーサー？ ビ、ビここにいるんだい！…？」

「アルフレッド…」

声はするのに姿は見えない。

あつちも俺の声には気づいてないようだ

「……………っ…起きるって…………」

アーサーの声が大きくなつた瞬間、暗い空間に小さな光が現れた。
その光はどんどん大きくなつていく

「言つてなんだろおおおおおおがああああああああ！」

アーサーの怒鳴り声と共に辺りは光に包まれ、俺もその光に飲み込まれた。

頭に激しい痛みを感じ、俺は目を開けた

「こつこつ…な、なんだいこの痛みは……」

「起きたかメタボ野郎」

「げ、アーサー」

「お前俺を見る度に最初に『げ』って言ひやがめり」

体を起こすとアーサーが不機嫌そうに俺のベッドの近くに座っていた

「なんで俺の部屋にいるんだい？勝手に部屋に入るなつていつも言つてるじゃないかー」

「こんのバカが！！」

いきなりアーサーに頭殴られた。

「何するんだい！？バカになつたりびつするつもりだい！…？」

「もともとバカだから大丈夫だろ？がー」

「なんだとあつ！…？」

「それよりーーお前なんであんな時間に外に出た！」

「…………え？」

アーサーに聞かれて俺は昨日のことを思い出す

確かに外に出たな……

「いや眠れなかつたから…………で、それがどうしたんだい？」

「な、お前……なんも覚えてないのか？」

アーサーは驚いている。

俺……昨日何してたっけ？

「お前……噴水の広場で気絶してたんだぞ？」

「あ、氣絶ーーー！」

氣絶したのなんて初めてなんだぞ！あ、昨日菊の家で気絶したか。ということは昨日で合計一回気絶したってことかい！？俺大丈夫かな！？

「お前表情変わりすぎだぞ…………」

「え、変わったかい！？」

「ああ、びっくりした顔になつたり納得した顔になつたりまたびっくりした顔になつて最後には絶望的なムンクの叫びみたいな表情になつてたぞ」

「…………そ、そつなんだ……」

自分でもびっくりだよ。

「昨日、フランシスと話が終わつた後にお前の部屋に行つたら誰もいなくてな。玄関にもお前の靴もなかつたし外に出たら家の門も開いてたからお前が外に出掛けやがつたのだと思つてな。連れ戻して説教するために探しに行つたんだ

せ、説教……

氣絶してよかつた……

「で、噴水の広場でお前がのびてゐるのを見つけたってわけだ」

「噴水の広場……」

昨日、噴水の広場で何が……

確か家を出た後……

叫び声が聞こえて、それでその叫び声をあげた男の後を追つて

それで噴水広場に行つたんだ！

で、噴水広場に着いた後におかしな奴が現れて男を……

俺はそこで昨日あつたこと全てを思い出した。
頭の中が真っ白になる

「…………昨日何があつた

アーサーは俺の様子に気付いて聞いてくる。

アーサーに話そうとしたがなんかコイツは信じてくれなさそうだな

.....

「な、なんもなかつたんだぞー。寒すぎて倒れちゃつただけだよー。」

俺は必死にいります。

「はあ？ 何もないわけないだろ。お前、顔真っ青だぞ」

「マジかよ

「ほ、ホントなんだぞ！ 顔が青いのはさうじつと具合が悪いからで……」

「……」

「元気だろ、お前」

50

アーサーに冷たく言われる。まあその通りなんだけど……

俺が何も返せずにいるとアーサーはため息をついて、

「もういい。今日は休んでる」

と黙つて部屋を出て行った。

アーサーが部屋を出ていくと俺はベッドに寝転がった。

「うー、アーサー言つたって信じてくれるわけないじゃないか。」

アーサーの悪口を言つた後、布団の中に潜りこんでため息をついた
「昨日のこと…………誰かに話した方がいいのかな……人が一人、
死んでるわけだし…………」

でも警察なんかが信じてくれるわけない。知り合いにも信じてもら
えなさそうだ。

呆れていると頭の中にある人物のこと思い出した。

「やうだ……菊に話そつーー！」

菊なら信じてくれるはず。

そんな希望を持つて俺はジャケットを羽織り、家を出た。

「お、アルフレッドじゃねーあるか
喉が渴いたから自販機でジュースでも買おうと公園に行つたら耀が
ベンチに座つていた。

「耀じやないか。よくこんな寒い中外出できるね

「その言葉、せつくりそのまま前へ返すあるよ」

自販機にコインを入れてコーラのボタンを押す。ガタガタッ、と音をたてながら「コーラ」の入った缶が取り出し口に落ちてきた。

「どうに行くつもあるか

耀も自販機でペットボトルのお茶を買ってベンチに座ってペットボトルのキャップを開けながら聞いてきた。俺も缶のプルタブを持ち上げた。

「んー？ああ、菊の家だよ

そう言つた途端、お茶を飲む耀の手が止まつた。そして驚いた顔で俺を見た。

「おまつ、菊に会つたあるか！？」

「え…………だつて君が昨日、菊に届ける物を代わつに持つてけつて俺に頼んできたから…………」

「そ、そういうばそつだつたある…………」

耀はお茶をがぶ飲みした。

みんななんで俺が菊の話をすると驚いたりするんだろ？

「まさか本当に菊に会つなんて…………」

耀がボソッと小声で何かを言った。

「何か言つたかい？」

よく聞こえなかつたから耀に聞き返した。

「なんでもねーある。早く菊のとこに行くよ」

耀はそれだけ言つとそのままを向いてしまつた。

追いかけようと思つたがめんどくさかつたからやめてそのまま森へと歩いていった。

アルフレッドが公園を出していくのを耀はさすと浮かない顔で見ていた。

「アルフレッド・F・ジョーンズ……」

耀はアルフレッドの名を口にして静かに笑つた

「やつぱつおもしろい奴ある」

やがて俺は森の入口に着いた。

入口で立ち止まり、森の中を覗きこむと風にもかかわらずたくさん
の木々のせいで太陽が隠れてしまい中は暗くて不気味だった。

「うわ…………暗いんだぞ…………」

暗いのがちょっと苦手な俺は顔を青くする。よく昨日普通に入つて
これたな、と昨日の自分自身に一番驚いている。

「で、でも菊と話もしたいし…………しょうがない…………行くか……」

そうため息をついてアルフレッドは森の中にゆっくりと入つていつ
た。

「うーん……」

森に入つてしまはらく歩いた後、アルフレッドは立ち止まり唸る。

「迷つたんだぞ……」

アルフレッドは周りを見渡す。

菊の家はどうにも見当たらない。

「！」のまえと同じ道で来てるんだけどな……

顎に手を当ててアルフレッドは首を傾げる。

「あのう……」

「つえーーー？」

突然、後ろから誰かに声をかけられアルフレッドはとびあがる

後ろを振り返ると髪が長い着物を着た少女がアルフレッドを見ていた。

「すいません。私、ある人を探しているのですが……。どこにいる
か知りませんか？」

少女は控えめにアルフレッドに問い合わせた。

「人？こんな所に？」

「はい」

一瞬、菊のことかと思ったが菊はあまり外に出なさそうし、人とあまり関わらなそうだから違うと思った。

「どんな人だい？」

「えつと…………漆黒の髪と瞳を持つ…………」

「漆黒の…………髪と瞳？それって…………」漆黒の髪と瞳、それは明らかに菊の特徴と一致している。

「知つて、いるのですね？」

アルフレッドの言葉を聞き、少女はいきなりアルフレッドの手を掴んだ。

アルフレッドは驚き、逃げようとするが少女の手を掴む力は強く逃げられなかつた。

「な…………」

「その人の名前、今すぐ教えてくれませんか？」

手を掴む力は一層強くなり、アルフレッドは顔を歪める。

その時、強い風がふいて森の木々がザワザワと揺れた。

「ひつ……」

少女は悔しそうな顔するとアルフレッドの手を乱暴に離し、森の奥へと消えていった

「？？」

アルフレッドは状況が掴めず、混乱している。

「アルフレッドさん？」

背後から優しく、落ち着いた声が聞こえてきてアルフレッドは振り返った。

「菊！？」

背後にいたのは着物を着て落ち着いた表情の菊だった。

「どうかしましたか？顔色が悪いようですが……」

菊は心配せずにアルフレッドに話しかけた。

「えー? いや、別に俺は元気だよ!」

アルフレッドは握まれていた手を背中に隠し、無理に笑つた。

「やうですか……。あ、おいしいお茶菓子があるので……
…私の家に来ますか?」

「お茶菓子ー? それってお菓子かい?..?」

「はい。では行きましょ!」

アルフレッドは菊の後ろをついていった。

「うーんお茶菓子、つていつのもおいしいんだぞ!」

「お気にめされてよかったです。いっぱいありますので家に持ち帰
つても大丈夫ですよ」

菊はお茶をすすりながら笑つた。

「やういえば…………アルフレッドさんさ、昨日夜中に外を出ま

したよね？」

「え？」

菊の言葉を聞いてアルフレッドは菊を見た。
いつもと違う少し思い詰めたような顔になつている。

「ん……あ……出たひけや あ出たんだぞ……」

「せつですか」

菊はまたお茶をすする。

アルフレッドもお茶をすする。そして噴く。

「…………」

菊は無言で盛大に噴かれ、壁や床についたお茶を冷ややかな皿で見
つめている。

「あ…………えと、うう」「…………」

「いや、大丈夫です。お茶を出した私が悪いんです」

そう言いながら笑顔でお茶をふく菊の皿は笑つていない。

アルフレッドはもし次こんなことをやつたらとんでもないことにな
ると無氣を感じた。

お茶をふきおわった菊にアルフレッドはふと仮になつたことを聞い
てみる。

「もしかして君も昨日夜中に外に出でたのかい？」

「…………」

菊は黙り込んだ。

アルフレッドはまたお茶を飲もうとしたがやつ もやつたことを思ってお茶をテーブルに置く。

「いえ、出でいませんよ」

「え、じゃあなんで俺が外に出たって…………」

「勘ですよ」

菊はお茶菓子をつまんで食べる。

アルフレッドはもし菊が外に出でいたらあのことを知つてゐるかと聞こうとしていた。

しかしアルフレッドは菊にそのことを聞くのをやめた。

なぜか…………菊には聞いてはいけない気がした

お茶菓子を食べた後、アルフレッドは菊の家を観察していた。

「それにしても不思議な造りだよね。菊の家は」

アルフレッドが呟くと縁側でお茶を飲んでいた菊は振り返る。

「私の先祖が住んでいた国はこういう家に住んでいたんですよ。ルーカスには私と同じ民族の方はあまり住んでおりませんのでアルフレッドさんにとっては珍しいですよね」

「菊の先祖が住んでいた国ってなんだい？」

「日本とこう四季が美しい東洋の島国ですよ。今実在しているのは不明ですが……」

菊は立ち上がりて部屋を出て行った。

やがて帰ってきた菊は一冊の本を持っていた。

「なんだい？ その本」

座敷に座り本を開いた菊の隣に座り、アルフレッドは本を覗きこむ。

「昔の世界の国々についての本ですよ。今はもうなじみでないけれども書かれているんですよ」

「へえ……日本ってこの辺のはどういじだい……？」

「うーんですかよ」

菊が指差した所を見ると、そこには海に囲まれた不思議な形のした陸地が描かれていた。

「随分と不思議な形のした国だねー！」

「島国ですかうね。同じ国でも陸地が所々離れているんですね」

確かに同じ国でも陸地が所々離れていた。

「おもしろいですね！俺の先祖の住んでいた国はどういじだいーー？」

「アルフレッドさんの先祖が住んでいた国はどういじですか？」

菊に聞かれてアルフレッドは固まる。

「…………え、まさか…………」

「…………知らないんだぞ」

アルフレッドは小さく呟ついた。

菊はかなり驚いている。

「え、親とかに聞いたことないんですか？」

菊が聞いた途端、アルフレッドは少し悲しそうな顔をした。

「俺…………親いないんだ……」

「え…………？」

菊は言葉を失う。

「いや、俺はよく覚えてないんだけど…………物心ついたときにはもつアーサーの家に住んでたんだ」

アルフレッドは懐しそうに菊に自分のことをついて話す。

「やつ…………ですか…………」

菊はアルフレッドの話を聞いて静かに言つた。

「すいません、失礼なことをお聞きして…………」

「ん？ いや、別に俺やつこいつとは気にしないタイプなんだ！」

アルフレッドはさつきまつたく違う様子でいつもみたいに笑つた。

菊はそんなアルフレッドの様子を見て微笑んだ。

「んー、で俺の先祖が住んでた国は一体どこなんだよー……」

アルフレッドはどこから持ってきたのかシェイクを飲みながら囁つた。

「私の勘ですが…………」

菊は日本が描かれていたページをめぐり次のページに描かれている日本と比べて大きい大陸を指差した。

「U・S・A? 不思議な名前だね」

「これはアメリカというんです。」

「アメリカ?」

アルフレッドは首を傾げた。

「当時、世界でとても有名だった国ですよ。この国に住んでいる方々は金髪の人や瞳が青の人が多いんです。」

「ま、まるで俺じゃないか!」

アルフレッドは金髪に青い瞳を持つている。

アメリカに住んでいた民族の特徴と一致している。

「じゃあ俺の先祖はアメリカに住んでいたんだね！俺と同じBIGな国でよかつたよー！」

「いえ、まだアメリカと決まったわけではないので……」

菊は苦笑する。

「それに、このアメリカが世界で一番大きいというわけではないんです」

「え？」

菊の言葉にアルフレッドは耳を疑う。

菊はページをめくつ続け、あるページで手をとめた。

「これは…………！」

アルフレッドはそのページを見て驚く。

そのページいっぱいに描かれた国。さつき見たアメリカの何倍もある。

「で、でかすぎるんだぞー！なんだいこーーー！」

「ロシアといふ国ですよ。当時、世界一の国土面積を持つていた国です」

「す、すごいんだぞ…………。ルークスには先祖がロシアに住んでた人はいるのかい？」

「ルークスは広いですから探せば必ずいると思われますよ」

菊は本を閉じた。

「よければ差し上げますよ、この本」

「え、いいのかい！？」

アルフレッドは田を輝かせる。

「はい。まだ二つ、三つ本はたくさんありますのでそれは差し上げますよ」

菊は笑顔で本をアルフレッドに手渡した。

アルフレッドも笑顔で本を受け取る。

「Thank you! 大事にするんだぞ……」

アルフレッドは本を胸に抱きしめた。

「あ、そろそろ帰らなきゃ……」

アルフレッドが時計を見て言つた。
「お帰りですか？送つていきまますよ」

「ここのかこ？じゃあようしきなんだぞーーー。」

アルフレッドは立ち上がり玄関へと走つていった。

外に出ると風が強くふいていて木々がザワザワと揺れていた。

「風、強いね……」

ぴょんとはねたアホ毛を揺らしながらアルフレッドが呟く。

「やうですね…………あと空模様も怪しいですしつ……早めに帰りますか」

菊とアルフレッドは屋敷の門を出た。

菊はゆうべつと森の道を歩いてくる。アルフレッドも菊の後ろについていく。

「今日は全速力で走らなくていいのかい？」

今日は昨日と比べてやけにゆっくりだからアルフレッドは菊に聞いてみた。

「はい、今日は…………」

アルフレッドの問に答えたよつとした菊の足が止まつた。アルフレッドも足を止める。

「ど、どうしたんだい？」

「しつ！ 静かに！」

菊に言われアルフレッドは黙る。

菊は背中に背負っていた布から刀を取り出し鞄から抜く。

クスクス……

風に乗つて氣味の悪い笑い声が聞こえて来る。

クスクス……

「な、なん……だい……！」の笑い声……

笑い声は途切れることなくずっと聞こえてくる。

「アルフレッドでここにきてきたよ！」

菊は空中を睨む。

「ついてくる？ な、何がだこ？ もちかゆゆゆ幽靈……？」

アルフレッドは顔を青くする。

「まあそんなものですか」

ケロッとした菊。

アルフレッドは危つて意識を手放しちゃつになつた。

クスクス……

笑い声はだんだん大きくなつていぐ。

アルフレッドは耳を塞いだ。しかし笑い声はアルフレッドの指の間を通つてアルフレッドの耳に届く。

「アルフレッドさん、私の家に戻りますよ」

菊はアルフレッドの手をとつた。

『逃がさないわよ』

突然、女らしき者の声が森に響き渡り菊とアルフレッドの周りに人
いや、わけのわからない生物が現れた。

「ひつ！？ななななんだいこいつらああああ！」

アルフレッドが生物を見て叫び声をあげる。

生物は形は人間だが、皮膚は剥がれとて全身が赤く目を光らせて
いた。

「数は少ないですね……。アルフレッドさん、そこから動かない
でくださいね」

菊は刀を構えて生物を見渡す。

ザワザワ、と木々が風で揺れた時、生物は一気に菊に襲い掛かつて
きた。

一瞬の出来事だった。

菊は襲い掛かつて来た生物を次々と刀で斬り、1分もしないうちに立っているのは菊とアルフレッドだけとなっていた。

アルフレッドは予想外の出来事にじばらく声が出せないでいた。

ずっと前を見ていた菊がアルフレッドがいる後ろを振り返った。

菊の着物は生物の血で所々赤い染みをつくなっていた。しかし菊は表情を変えずに刀についた血をはらつて鞄におさめ、立ち上がりそれにアルフレッドに手を差し延べた。

「大丈夫ですか？ 一回、私の家に戻りましょつか」

「う、うん……」

心臓がまだバクバクしていて状況が理解できないアルフレッドは菊の手をとつて立ち上がった。

菊の家に戻り、アルフレッドは座敷でくつろいでいた。

しばらくして別の部屋に行っていた菊が戻ってきた。

「申し訳ありません、アルフレッドさん。今日は危険ですので私の家に泊まっていてください」

菊は申し訳なさそうにアルフレッドに言った。

「わかつたんだぞーじゃあアーサーに電話しないと……」

アルフレッドは携帯を取り出して自分の家に電話をかけた。

『はいもしもし、あなたですか？』

電話をかけてすぐにけだるそうな声の家の主が電話に出た。

「あ、もしもしアーサーかい？」

『な、アルフレッドー？お前ビリ……』

さつきのけだるやうな声と違い、突然アーサーは声を大きくしてきました。

「えと……今、昨日話した菊ん家にいるんだぞ。で、なんだかんだで菊ん家に泊まるんだぞ」

『はあ！？なんだかんだってなんだよー』

「なんだかんだはなんだかんだなんだぞ」

『意味わかんねえよー』

電話の向いではアーサーはかなり興奮しているようだ。いつもながらいふことめんどくさいからアルフレッドはむさと電話をきら

うとした。

「あー、もうきつていいかい？」

『大体今日は俺が夕食の『デザート』にスコーンを作つてやつたのに……』

マジで今田帰れなくてよかつた。

アルフレッドは心の中でガツツポーズをした。

アーサーはブツブツと何かを言つてゐる。きりたいけどきつたら後でガミガミ言われるからきれない。

『あー、アルフレッド?』

突然、アーサーの声がフランシスの声に変わつたのでアルフレッドは驚いて携帯を落としそうになつた。

「フ、フランシス!？」

『「」めんなー。アーサー、今酔つ払つてて』

「酔つ払つて……？」

アルフレッドは時計を見る。

時計は7時をさしていくまだ酔つには早い時間だ。

「だ、大丈夫なのかい?」

『んー？お兄さんもう慣れてるから大丈夫だよー』

フランシスは陽気に答える。

『菊ん家に泊まるひしいね、楽しんで来てねー』

さつさまでのアルフレッドとアーサーの会話を聞いていたのかフランシスは状況を把握していた。

「あ、うんー」

『で、ちょっと菊にかわってくれない？』

「菊に？うん、わかつたんだぞ！」

フランシスに言われアルフレッドは台所で夕食の準備をしている菊の元に走っていった。

「おや？アルフレッドさん、どうかなさいましたか？」

台所の入口に立っているアルフレッドに付き割烹着姿の菊は声をかける。

「フランシスが菊に変われ、って…………」

「フランシスさん？」

「あ、俺とアーサーと一緒に住んでる奴なんだぞ」

「そうですか……わかりました。少しお話をさせていただきますのでアルフレッドさんは鍋を見ててください」

「了解なんだぞ！」

アルフレッドは手を挙げて元気よく答えた。
そんなアルフレッドを見て菊は笑うとアルフレッドの携帯を手に屋敷の庭に出た。

「もしもし、お電話変わりました」

携帯電話を耳に当て、菊はいつもと同じように静かに言った。

『おーー・まじで菊じやんーー・やつほーーー』

「ハニバーン、フランシスさん」

電話の向ひでフランシスがかなり喜んでいるのは菊にもわかった。

『今日はアルフレッドがお世話になるねー。つるさこ奴だけど大丈夫?』

『賑やかで楽しいので全然大丈夫ですよ』

菊は微笑みを浮かべた。

Episode 9 (前書き)

私は文章を書く力が本当に欲しいです……

なんだこのグダグダ感。

今日は世界のお兄さんと菊がひたすら話しまくるところのお話。

『それにしてもお前、十年くらい前からずっと『モーリー』もつてたよな？何してたんだ？』

「たまっていたアニメを見たり同人誌などを見たり……」

『あ、うん、もうそれ以上はいいや……』

「やつですか？」

語り始めた菊をフランシスがとめる。
なんかす』く長くなりそつだつたからだ。

『まあやつこの理由もあるけど…………ほかにもあるんだろう・理由』

フランシスは急に真面目になり菊に問う。

「………… やすがフランシスさんですね。鋭いです」

菊は降参したように溜め息をついた。

「その通りです。この屋敷から出なかつたのには重要な理由があります」

『やつぱつな……』

フランシスは声を暗くする。

『まあいいや、その理由は今度聞かせて』

「わかつました、本当にもう少し頭を潜めてよつと想つていたのですが……」

菊は瞼を閉じて、昨日のことを思い出す。

突然、自分の前に現れた金髪に青い瞳の元気な青年。

「アルフレッドさんがJの家に来た」といって私はJの家に引もじもるのをやめました」

アルフレッド・F・ジョーンズ。

彼は菊と昨日会つたばかりなのに菊のことをとても信頼していた。まるでずっと前から一緒にいたように。

『アルフレッドが原因で菊は弓削いじむのをやめたわけか、なんか悪いことしたな』

「いえ、アルフレッドさんのおかげで私は今この世界を知ること
が出来ましたし。それにアルフレッドさんは王耀^{ワカヤオ}さんに言われてこ
こに来たわけですし……」

『ま、耀も暇つぶしにアルフレッドを行かせたんじゃねーの?』

フランシスは困ったように呟いた。

「暇つぶし…………ですか」

菊は真っ暗な空を見上げる。

『暇つぶしにしかやあものす』ことになつちゃつたけどな

「私も驚きました」

菊は空を見上げながら行つた。

「私の屋敷はある条件を満たした人にしか入れない空間にあります。私は屋敷に入る人達は全員把握しているつもりでした」

『でもアルフレッドはその人間達の中に入つていないにもかかわらず普通に菊の屋敷にやつて来た、ってわけか』

「…………はい。私は長年生きていましたが…………あんなに驚いたのは久しぶりでした」

『そうか。菊でもひっくり返すことあるんだな』

電話の向こうでフランスが笑う。

「私だけ驚きはしますよ。なんたって……」二〇〇〇〇〇〇〇

台所から突然、アルフレッドの叫び声が聞こえてきた。

『お、な、なんだ?』

その声はフランシスにも聞いたらしい。

「すいません、きります」

菊はフランシスに一言謝つてから電話をやつた。

菊は携帯を握り、台所に走つていった。

「アルフレッドさん……どうかなわこました……か……」

「あ、菊……」

台所に着くと窓口では鍋からお湯が噴き出しがる。アルフレッドがパクつていた。

「お、落ち着いてください!火を止めて……」

「火つてどうやってとめるんだい?」

「口の口の下にあるつまみをひねつて……」

「お湯が邪魔するんだぞ……あつづつ……」

「と、とつあえず水を……」

その後、火はなんとか消せてお湯も溢れ出さなくなつたがその日の夕食はおにぎりだけになつたといふ。

「お腹空いたんだぞ……」

「我慢してくださー」

夕食を済ませ、アルフレッドは畳の上に寝つ転がってテレビを眺めながらせんべいをかじっていた。

菊は夕食の片付けを終わらせて正座してお茶を飲んでいる。テレビではお笑い番組がやっていてテレビの中の芸人が何かを披露するたびにアルフレッドは大爆笑する。

「H A H A H A H A ! ! なんだいそれ！おもしろいすぎるんだぞ！！」

アルフレッドにつられて菊も静かに笑っている。

やがて時計は9時をまわり、お笑い番組は終わりなんだかよくわからぬディレクタが始まって退屈になつたアルフレッドは菊に話しかけた。

「やついたら菊、頼つて何歳なんだい？」

見た目はアルフレッドより年下に見えるが気になつたため聞いてみた。

「やつですね…………忘れてしましました…………」

菊は少し考えた後、答えた。

「忘れたって…………そんなんに歳とつくるのかい？」

「まあやつこいつ」とです……」

菊は机の上に置いてある目からせんべいを取りかじる。

「アルフレッドさん…………今田、私の家に来る前に何かありましたか？」

菊は声を落としてアルフレッドに聞いた。

菊の表情は何か思い悩んでこるよつと見えた。

「何かつて…………？」

「森で誰かに話しかけられたり…………しましたか？」

アルフレッドは菊に問われすぐに答えられなかつた。

もし本当にことを言つたら菊に何か迷惑をかけてしまつかもしだい。それだけは嫌だつた。

「べ、別に…………」

「では手を見せてくれださこ」

「げ…………」

今は手は手袋をしていて隠れている。

アルフレッドは仕方なく手袋を外し両手を菊に見せた。

「…………」

アルフレッドの右手は森で出会った少女に掴まれた跡が痣となつて残つていた。

菊はそれを黙つて見ている。

アルフレッドは仕方なく話すことにした。

「今日…………菊の家に来る時に森で和服を着た女の子に会つたんだ。その子は人を探していて特徴を聞いたたらその子が探していている人の特徴が菊と同じだつたからもしかしたら…………、って思つてたら女の子はいきなり俺の手を掴んできて…………」

「ひうなつた、と…………」

菊が悲しそうな顔をしてアルフレッドの右手を握る。

「すいません…………」

そして菊は頭を下げてアルフレッドに謝つた。

「な、なんでだいー? 菊は悪くないし…………」

「いえ、そのこともわづかのことも全て私の責任です」

「わづかの…………」

アルフレッシュはせりああんなことがあったのに完全に忘れていた。
平和な奴だ。

「セリえればわるのは一体なんなんだい？教えてくれないかい？」

アルフレッシュはさつきの不可解な出来事について菊に聞いてみる。

菊はしばら黙っていたが口を開いた。

「アルフレッシュさんも関わってしまった」とですしつつ……わかりました、お話ししましょう」

菊はお茶を飲み干すとアルフレッシュの顔を真っ直ぐ見つめた。

菊はゆっくりと丁寧に話しあじめた。

「先ほど私達を襲つてきたもの…………その輩は『やから邪鬼』と呼ばれております」

「ジャッキー？」

「邪鬼です。カンフーはできません」

アルフレッドの間違いを菊は冷静に正す。

「邪鬼は簡単にいえば妖怪や怪物のよつなものです」

「よ、妖怪だつて！？」

幽靈やら妖怪などの類が大の苦手なアルフレッドは顔を青くする。

「そ、そんなものが本当にいたなんて…………嫌なんだぞ」

「残念ながらルークスには大量の邪鬼が散らばっていますよ」

やばい、一瞬目の前が真っ暗になつた。

アルフレッドはぼーっとする頭を叩いて無理矢理停止しかけている脳を起こす。

「邪鬼は人々に危害を『与え、不幸にします。ときには人を“死”に至らしめることもあります」

「“死”に……！？」

「はい。邪鬼はそのことから『かりびと 狩人』と呼ばれることもあります」

「狩人…………？」

「人を狩る、という意味です」

菊は目を伏せる。

「邪鬼は昔まで山奥に身を潜めて暮らしていました。しかし2000年前に邪鬼は突然ルーカスの人々を襲い始めたのです」

菊は悲しそうな表情を浮かべていた。

なぜ邪鬼はルーカスを集中的に襲うのだろう？
アルフレッドは疑問に思つた。

「そしてアルフレッドさんが出会った少女…………それも邪鬼です」

あの子が…………邪鬼…………！？」

「で、でも邪鬼は怪物とかだつて…………あの子は普通の人間だつたよ！？」

「邪鬼は別の生物に姿を変えるという特殊な能力を持つています。邪鬼にとつては人間の少女に姿を変えることなど簡単なことなので

すよ」

アルフレッドは何も言えなくなってしまった。
しかし菊は話すのをやめない。

「あの少女の姿をした邪鬼は森に入ってきた」アルフレッドさんに田
をつけたのでしょ?」

「じゃあ…………わしきの変な笑い声や俺と菊を意味がわからない
生物に襲わせたのは…………」

「あの少女です」

菊はきつぱりと言った。

「…………今日は」れくらににして寝ましょ?か……。お布団しき
ますね」

困惑しているアルフレッドに気付いたのか菊は話すのをやめ、押し
入れから布団を取りだし菊の布団とアルフレッドの布団を座敷に敷
いた。

「今日はこりこりあつて疲れましたよね。ゆっくり休んでください」
菊はアルフレッドが布団に入ったのを確認すると電気を消して自分
も布団に入った。

アルフレッドは真っ暗になつた部屋の天井を見つめながら頭の中で
様々なことを考えていた。

なぜ菊はこんなにいろいろなことを知つてゐるのだろう。

なんであの少女の姿をした邪鬼は菊のことを探していたのだろう。

なんで菊は邪鬼やいろいろなことを俺に話してくれたんだろう。

様々な疑問がアルフレッドの頭の中でぐるぐると回つ続ける。

そしてアルフレッドが一番氣になる」と

アルフレッドは隣でオーナーと対話をたてる菊を見た。

菊は一体…………何者なのだろう…………

Episode 11(後書き)

この話は順調に進んでいて1時間もかからないうちに出来上がると思つていたら謝つてクリアボタンを押してしまい画面は執筆中の小説の画面から待受へ…………（ヘタリアの）

マジで心が折れた瞬間でした。

てことでもう絶望的な気持ちのまま即効でこの話を執筆したのでおかしい部分が多くあるかもしれませんが温かい田で見てください…

感想お願いします！！

「う、うーん……？」

アルフレッドは窓から差し込む朝日が眩しくなり目を覚ました。隣で寝ていたはずの菊はもうすでに起きているのか、布団が丁寧にたたまれた状態で置いてあつた。

体を起こして時計を見るとまだ7時だった。

アルフレッドは基本10時に起きるため一度寝じょいと布団をかぶつた。

「うー…………寒いなあ…………」

アルフレッドが布団の中で縮こまつていると

グウー……

「あ…………」

アルフレッドのお腹から小むきけじまつと聞こえる音が鳴った。よく考えてみるとアルフレッドは昨日なんだかんだで夕食におこぎりしか食べてないから今、結構お腹が空いている。

「腹減ったんだぞ…………」

アルフレッドは再び体を起しして座く。
そんなアルフレッドのいる部屋に台所の方からいい匂いがただよつてきた。

「?なんなんんだいこの食欲をそそるいい匂いは……」

アルフレッドは布団から出て着替えた。
着替えてから部屋から出ると台所の方で音がする。
木の床を軋ませながらアルフレッドが台所に行くと中では菊が何かを作っていた。

「あ、おはようございます。よく眠れましたか?」

入口からよだれをたらしながら覗くアルフレッドに気が付き菊が笑顔で挨拶をした。

「うふーもうぐっすり寝過ぎて今夜眠れなさそうだよー。」

実際アルフレッドは今眠くて仕方がない。

「今、朝ごはんを作っていますので待っていてください。」

菊はそつと朝飯作りを再開した。

「わかったんだぞ!」

アルフレッドは返事を元気よく返事をして、暇だから庭に出ることにした。

庭にでると鳥が木にとまっていたり、池が朝日に反射して輝いたりしていた。

「うーーん、気持ちいい朝なんだぞ！！」

アルフレッドは背伸びをしながら言った。

森は朝日が差し込んで昨日の夜とは違ひ明るい。アルフレッドは縁側に座りのんびりする。

「わふっ」

「おおおおおお……？」

突然隣から何かの鳴き声が聞こえてきてアルフレッドは文字通り飛び上がった。

隣を見ると毛がもふもふとしたかわいらしい犬がアルフレッドを見つめていた。

「き、菊の犬かな……？」

アルフレッドは犬に触る。
もふもふとしていとても気持ちいい。
犬も大人しいらしくしっぽを激しく振つて喜んでいる。

「かわいいんだぞ！」

アルフレッドは犬を持ち上げて抱きしめる。

「アルフレッドさん、朝食の準備できましたよ」

「あ、菊……わかつたんだぞ……」

犬とじやれながらアルフレッドは答える。犬は菊に氣付き菊のもと
に走つていった。

「おや、ぼちくんではないですか。今までどいで遊んでいたのです
か？」

自分の所に走つて来た犬を抱きかかえ、菊は犬の頭を撫でる。

「やつぱり菊の犬なのかい？」

「はい。ぼちくんです」

「わふわー。」

ぼちくんは元氣よく返事する。

「あ、朝食にしましょうか」

ぼちくんを抱えたまま廊下を歩き出す菊をアルフレッドは追いかけ
た。

Episode 13 (前書き)

かなり間が空いてしまいましたね；
すいません；

「あ、そういえば菊」

「？はい、なんでしょう？」

アルフレッドが焼き魚を食べながら菊に話し掛ける。

話し掛けたといつてもただ暇だったから話し掛けただけだった。
ということでお話しあげたはいいが当然のことのように話題に困って
しまうアルフレッド。

とりあえず今アルフレッドが一番気になつていてることを聞いてみた。

「菊、君って何者なんだい？」

「…………え？」

普通、朝食の時に話す話題じゃないのをアルフレッドはバカ、……
……じゃなくて大バカなので知らなかつた。

これには菊も素つ頓狂な声を出してしまつ。

「な、何者か、と言いますと？」

「いやーなんか菊、俺の知らないことたくさん知つてるしー…………

あと邪鬼のことになんかも詳しいし…………なんでかな?って思つてさ

』

アルフレッドは味噌汁をすばやく飲む。

菊はアルフレッドの言葉にまだ動搖を隠せていない。

「え、いや…………私の先祖がそういうのを被つていた、からですかね?」

「そりなのかい!? あんな凶暴な奴らを!-?」

「え、あ、はい」

菊は戸惑いながらも答える。

「なんだ! もしかしたら菊も人間じゃないかもーーって考えてたよ俺!-」

「わ、私が?」

菊は驚いた表情になる。

「だつてさ、邪鬼をすぐに倒しちゃつてしまーーどんな状況でも冷静にいられるしー。」

「そ、それは…………」

菊はお茶を飲み、ため息をつく。

「あ、また今度、菊のことを教えてくれよなー。」

アルフレッドの言葉に菊の目がわずかに見開いた。

「…………はー」

菊は小声で返事をした。

アルフレッドは菊の返事を聞いて笑うと朝食を食べはじめた。

「こつか…………話せるといいですね…………」

菊はアルフレッドには聞こえないような小さな声でそう呟いた。

「菊、俺そろそろ帰るよー。」

「あ、はい。送りますよ」

「Thank you!...またあんなのに襲われるのは嫌だからね！」

菊は立ち上がりにつものように刃が入った袋を持った。

今回は何事もなく森の出口まで辿り着くことができた。

「家までお気をつけてお帰りくださいね」

「うん！あ、そだ！菊、俺の家に来ないかい！？」

アルフレッドが笑顔で菊に聞いてくる。

「アルフレッドさんの家、ですか？」

「まあ正確にはアーサーの家なんだけどね！菊は俺の友達だしアーサーやフランシスに紹介したいんだ！」

アメリカが先に森から出て菊に手を差し出す。

菊はしばらくその手を見つめていたがやがて悲しそうな顔をして後

るに一步下がった。

「…………菊？」

アルフレッドが菊の様子に首をかしげた。

「…………すこません、アルフレッドさん…………。私は行けません……」

「…………え？」

アルフレッドは手を菊に差し出した引っ込ませた。

「よ、用事があつたかい？」

「いえ、ただ行けないんですね」

「行けない…………って？」

菊はさらに悲しそうな顔をした。

「気にしないでください…………」

「や、そつか…………じゃあ菊が来れる日においでよーーー」

「あ…………はー。その時はお邪魔させていただきます」

菊はいつものように笑った。

「こいつが絶対に来てくれよーじゃ、Bye Byeなんだぞー！」

アルフレッドは手を降りながら走つていった。

「いつか…………ですか。行ける口が来るといいですね…………」

菊はそう呟くと家に戻つていった。

家について菊はすぐに電話のある所へと行き、受話器を取つてある人物に電話をかけた。

「…………もしもし、私です。本田菊です。少しお願いがあるのです
が…………よろしいですか…………？」

そつ電話の向こうに話す菊の表情は深刻だった。

「うーん……そのまま家に帰つても暇なだけだしな……どっかに行くなつてなつてもなー……」

アルフレッドが街をぶらぶら歩きながら呟く。

「あれ? アルフレッドだーー!」

「?」

振り返るとそこには茶髪の「ローロ」した表情の青年と、金髪のムキした青年が立っていた。

「フーリシアーノ・ルートヴィッヒじゃないか!」

「冬にお前が外に出るなんて珍しいな」

金髪をオールバックにして青い瞳の青年、ルートヴィッヒ・バイルシコミットは驚いた顔で言つた。

「アルフレッド何してゐるのー? 散歩?」

茶髪でくるとを出した青年、フーリシアーノ・ヴァルガスは手を上下に動かしながらアルフレッドに聞いてきた。

「あー、ちょっと友達の家に行つててね。その帰りだよ」

「へーーーーあ、今俺達おいしいレストランに食事に行こうと思つて
るんだけどアルフレッドもどう?」

「おこしに食事かご……? 行くんだぞ……」

「そうか。では三人で行こう」

三人は並んで歩き出した。

歩いていると前方に人だかりが出来ていた。そこには警察と思われる制服を着た人も所々にいて、近くにはパトカーもとまっていた。

「？なんだいあれ……？」

「ヴェー？」

「何かあつたのか？」

三人はそこに近づいていった。

アルフレッドは人をかきわけ、人だかりの原因を見ようとした。

なんとか人をかきわけてアルフレッドはその人だかりの原因を見る
二事ができた。

「 ジ、 れは……！？」

アルフレッドは目を疑つた。

人だから中心にいたのは…………

体から血を大量に流して倒れている女性だった。

「つぶはーーやつと出れたー……つてヴホーーー?」

「な…………」

アルフレッドのように「ひどい」みをかきわけ、やつて来たフューリシアーノは女性を見て驚き、ルートヴィッヒは言葉を失ってしまう。

「な、なんだいこれ…………!?」

「！」
「怖いよーー!!」

フューリシアーノが泣き出す。

「落ち着けフューリシアーノー!!」

ルートヴィッヒは混乱しているフューリシアーノに向ひつ。

「なんでルーカスにこんなことが…………」

今までまったく事件や事故がなかつた平和な街・ルーカスにこんなことが起きるなんて…………

その場にいる人は全員そう思っていたに違いない。

アルフレッドは最初これは夢かと思ったが頬をつねつたら痛かった。
これは夢じゃない。アルフレッドは確信した。

「ほら、どいて!!」

女性が救急隊員によつて救急車に運ばれていく。

遊んでいたおもちゃが取られてしまった子供のように入だかりを作る原因がなくなつた途端、人だかりはぐずれていつた。

しかしアルフレッドとフョリシアーノとルートヴィッヒの三人はずつとそこに立ち尽くしていた。

Episode 14 (後書き)

ルートヴィッヒは本来名字ないのですがフェリシアーノとかあるのにルートだけないの少し変かなー、と思バイルシュミットという名字にさせていただきました。

なぜバイルシュミットにしたかというといづれ出るの人と兄弟だからです。w

Episode 15(前書き)

かなーり短いですw

「ただいまなんだぞ……」

アルフレッドは家に帰ってきた。
あのあと、フェリシアーノとルートヴィッヒとアルフレッドの三人
でレストランに行く予定だったのは中止にしてアルフレッドは家に
帰ってきたのだ。

「アルフレッド……」

アーサーが慌ただしく靴を脱いで家に入ってきたアルフレッドのも
とに走ってきた。

「アーサー？ どうしたんだい？」

「どうしたも」「どうしたもねえよ……お前なんで昨日帰っこなかつ
たんだよ！」

「え？ 菊の家に泊まるって……電話したんだけど……」

「はあ？ 電話？」

アーサーが太い眉をひそめる。

「ああアーサー 昨日酔っ払ってたからな、覚えてないんだろ」

フランシスがリビングから出てきてアーサーに言つ。

「あ、そういえばアーサー酔つ払つてたね」

「酔つ払つてねえよーー。」

「認める、元ヤン」

「元ヤン言つたなーー何さつげなく言つてんだよーー。」

「え？ アーサー元ヤンだったのかい？」

「やうなのーもうホント手つけられなくて、お兄さん心折れそつたーー！」

「あああーー黙れ変態ーー！」

「変態言つなーー。」

アーサーとフランシスはいがみ合ひを始めてしまつた。

アルフレッドは呆れ顔で一人から離れて自分の部屋に行つとした。

「あ、ちょっとアルフレッド待て」

しかし突然、アーサーに呼び止められた。

わざわざアーサーはフランシスとのいがみ合ひを中断している。

「なんだい？ いきなり…………」

アルフレッドが聞き返すと、アーサーは驚くべき言葉を口から発した。

「今後一切、これから菊の家には行くな。」

Episode 16 (前書き)

時間がなくて一週間ぶりだといつのこと一話しかできませんでした

……

すこません(・・・)

「どういふことだい…………？」

なんとか声を絞り出してアルフレッドはアーサーに聞く。

「そのままの意味だ」

アーサーは冷たく返した。

「もう菊の家には行くな。絶対だ」

アーサーはそれだけ言つとリビングに入つていってしまった。

アルフレッドはまだアーサーの言葉の意味が理解できず、その場に立ち去っていた。

「はあ、アーサー本当に不器用だな…………」

フランシスが頭をかきながらアルフレッドの肩に手を置いた。

「ま、とつあえずだ。しばらくは菊の家には行くな。」

「で……も、菊は……」

アルフレッドの声は震えていた。

フランシスはそんな様子のアルフレッドの頭を撫でた。

「少しだけの間だ。アーサーのことだから自分の言つたことなんか一週間で忘れるだろ。」

フランシスが笑つた。

「フランシス……」

「あ、あと。今日、街で事件あつただろ？ 気をつけろよ

フランシスはそう言つて自分の部屋に入つていった。

「…………寝よひ…………」

アルフレッドはそう呟いて自分の部屋へと歩いていった。

何日たつても街では毎日のように血を流して人が倒れていた。
警察はこれを『連續通り魔事件』として捜査を進めているらしい。
しかし、犯人はわからないままだつた。

テレビのニュースではこの事件の事ばかりやつていて、むかし街での事件を知らない人はいないだろ？

アルフレッドはずっと外に出ていなかつた。
毎年冬になつたら家にこもつつきりだつたが、今年は自分でも驚く
くらい外に出ていた。

菊という、友達に会うために 。

アーサーに菊の家に行くな、と言われてもう一週間近く経つていた。
しかしアーサーはまだアルフレッドが菊の家に行くことを許さなかつた。

初めの方はアルフレッドはアーサーに対して反発していたが最近は
反発してこなくなつた。

といふか、アルフレッド自身が部屋にこもつて食事や、お風呂の時
くらいしか部屋から出て来なくなつた。

そんな日が続いたある日、フランシスは思い切つて新聞を読みながら紅茶を飲んでいるアーサーに言つた。

「おいアーサー。いい加減にしたひどいなんだ?」

フランスの言葉に、アーサーは紅茶をテーブルに置き、フランススに聞き返す。

「何がだ」

「アルフレッドのことだよ」

フランスがアーサーに向かいの席に座つて、アーサーを見る。

「いつまでアルフレッドを菊の家に行かせないつもり?」

「前にも言つただろ。これからずっとだ」

アーサーが新聞から目を放し、エメラルドグリーンの瞳でフランススを睨んだ。

「どうして、そんなことを……」

「俺の勝手だろ」

「アーサーの勝手でアルフレッドと菊を引き離す、っていつの? いくらアーサー、友達がいないからってそれはひどすぎるんだじゃ……」

「……」

「友達いないは余計だバカ!――」

アーサーがフランスに怒鳴る。

「でも」のままだと「アルフレッシュ」、ずっとあのままだぜ？アーサーはそれでいいのかよ」

「俺の知ったことぢやねえよ」

「だつてアルフレッシュ、今は冬休み中だけど学校が……」

「だから俺の知ったことぢやねえって」

「だつてアーサー、一応学園の生徒会長だし……」

「一応つてなんだ、一応つて」

握り拳を固めて、もうすくでキレるオーリーを出していくアーサーからフランシスは少し離れた。

「生徒会長がやつしやつする問題じやねえだろ。生徒会の責任だつていづなり仮にも生徒会副会長のむ前がなんとかしろー。」

「めんせくせこからぢだよー」

「じやあ最初つから言つなー。」

「つものよつた喧嘩を始めるアーサーとフランシス。

ワイン野郎だの元ヤン紳士だの、汚い言葉が飛び交う。

「君達つらがむせじよー。寝れないじやないか」

突然、リビングの入口の方から聞こえてきた声にアーサーとフランシスは驚いて動きを止める。

二人が入口の方を見ると呆れた顔をしてこちらを見ているアルフレッドがいた。

「な……アルフレッド……どうしてお前、部屋から……」

「なんだいその言い方は一人を引きこもりみたいに言わないでくれよ……」

『『『いやお前今まで引きこもつてたんですけど…………』』』

珍しくアーサーとフランシスの考へていねいどが一緒になった。

「でもアルフレッド、ずっと部屋から…………」

「ああ、ちょっと氣分がブルーだつたからね。でも、もう立ち直つたんだぞ……」

冷蔵庫から「一ラを取り出して笑顔で言つアルフレッド。

「そ、そつか……よかつた……」

フランシスがまだ驚いた表情のままアルフレッドに言つた。

アルフレッドはまた笑うとソファーにかけてあつた自分のジャケットを取つて、羽織つた。

「どうか出掛けのか?」

「うん!暇だからね」

袖に腕を通して、アルフレッドはリビングのドアのドアノブに手をかけた。

「菊の家には、行くなよ」

アルフレッドがドアノブを回す前にアーサーが言った。

「ちよ、お前…………」

フランシスがあわててアーサーの口をふさぎ、アルフレッドを見る。

アルフレッドは動きを止め、アーサーを少し睨んだ。
アーサーも睨み返す。

するとアルフレッドはこつもと同じ表情に戻り

「まつたく…………アーサーはしつこいんだぞー行かなこよー」

アルフレッドはそれだけ言つてコンビングを出て行った。

Episode 17 (前書き)

あけましておめでとうございますーーー。

今年もこのダメ小説をよろしくお願ひしますーーー。

玄関の扉を閉め、扉に寄り掛かりながらアルフレッドは大きなため息をついた。

「バレバレだつたんだぞ……アーサーに……」

そう、アルフレッドはまだ諦めていなかつた。

今日だつて黙つてればバレないんじやね？的なノリで菊の家に行く気満々だつたのだが、アーサーはアルフレッドの脳を覗いたんじやないかと思うくらいお見通しだつた。

「ちえ、早く菊と遊びたいのになあ…………」

口を尖らせながらアルフレッドは家から出た。

街を歩いていると、見覚えのある青年一人が前を歩いていた。

「フーリシアーノ！ルートヴィッヒ！…」

「…あー、アルフレッド！」

二人がアルフレッドに気付き、フェリシアーノが走つてくる。体の動きに合わせて、フェリシアーノのくるんも一緒に揺れる。

「フラン시스兄ちゃんがアルフレッドがずっと部屋から出でこないつて……」

「あ、ああ。もう大丈夫なんだぞ！」

「体調でも崩したのか？」

「いや、俺はずっと元気だつたんだぞ！－！」

アルフレッドは自分を心配する一人に笑顔を見せた。それを見た二人は安堵したような表情を浮かべ、笑顔になった。

「そうだアルフレッド！－この前行けなかつたレストラン行こう－！」

「やうだね！－行こう！－」

「ルートも－早く－！」

「あ、ああ」

三人は並んで歩き始めた。

三人はフェリシアーノおすすめのレストランに来ていた。
外装も内装も綺麗で落ち着いた感じの店だった。

「俺、ここ のパスタ大好きなんだあ！！」

フェリシアーノがメニューのパスタの写真を指差しながら言った。

「うまそうだな。俺もパスタにしよう」

「あ、俺はハンバーガーがいいんだぞ！」

ウェイトレスに注文をした後、アルフレッド達は世間話で盛り上がっていた。

その世間話は、だんだんルーカスで起こる事件の話へとなつていた。

「そりいえばさ、この前通り魔に襲われた人、大怪我だつたんだつてー……」

フェリシアーノが少し悲しそうな顔をしていった。

「最初の方は被害者は軽い怪我だつたんだけどな。日が経つにつれて被害者の状態はひどくなつていつていてる」

「いつたい犯人は何をしたいんだい？」

注文したコーラをストローで飲みながらアルフレッドは言った。

「通り魔だからな。意味もなく人を傷付け楽しんでいるんだろう」

「ヴ、ヴェー…………怖いよ…………」

ルートヴィッヒの言葉にフェリシアーノが涙目になる。

「大丈夫だ。今回の通り魔が動くのは夜と決まっているんだ。夜に外に出なればいいんだ」

「う、うん…………」

少し顔を青くしながらも頷くフェリシアーノ。

「犯人…………捕まるといいんだぞ…………」

「うん…………」

「そうだな…………」

三人は俯いた。

「お待たせしましたー」

そんな時、料理が来てアルフレッド達は美味しいように料理を食べはじめた。

その時はもう事件について話したことはずっかり忘れていた。

アルフレッド達がレストランで料理を食べ終わる頃には、辺りは暗くなつてきていた。

「冬は暗くなるの早いねー」

「そうだな……」

フェリシアーノとルートヴィッヒがそう呟く。

「それでは帰るとするか」

「了解であります隊長！——アルフレッド、一緒に帰ろ——. . .」

「あ、大丈夫なんだぞ！家近いし」

「そつかー……じゃあまたね！——」

「うん！」

フェリシアーノとルートヴィッヒは一人並んで帰つていった。
アルフレッドは一人を見送つてからある所に向かつて足を進め始めた。

友がいる、

『名もなき森』に向かつて

アルフレッドが森に向かっていくにつれて、辺りはどんどん暗くなつていった。街の街灯がうすらと明かりをともしひはじめる。

アルフレッドが森の入口に着いた時はもう辺りは真っ暗になつていた。

入口から中を見ると中はもう真っ暗で何も見えなかつた。
しかし風が吹くたびに暗闇の中からザワワザワと木々が揺れる音がする。

いかにもお化けが出そうだ。

「……こんな不気味な場所なんて聞いてないんだぞ……」

お化けが大の苦手のアルフレッドはこの中にいることはもちろん恐かつたが、がんばって入ることにした。

その時、突然アルフレッドの腕を誰かが強く掴んだ。

「えつ……？」

驚いて後ろを見てみるとそこには自分の家の主、アーサーがアルフレッドを腕を掴んで睨んでいた。

「菊の家には行くなと言つただろ……。」

アーサーが怒鳴る。

「だ、だつて……」

アルフレッドは言い訳を必死に考えようとするが、なかなか思い浮かばない。

「帰るぞ」

アーサーがアルフレッドの手を引く。

「ま、待つてよ……菊に……」

「会うなって言つてんだよ俺は……」

アーサーがまた怒鳴る。

「なんでだい！？なんでアーサーは俺を菊に会わせてくれないんだ
い！？」

「つ……それは……」

「アーサーが友達いないからつて俺も巻き込もうとするなんてあん
まりだよ……」「ちげえよ……！友達いない言つな……！」

「え？ ジャあいるのかい？」

「ぐつ……」

友達がないアーサーは当然のように何も言えなくなる。

「やつぱいないんじゃないか……」

「……う、うるせえ……ほら帰るぞ……」

アーサーはアルフレッドを無理矢理引っ張つて帰つていった。

アルフレッドとアーサーが森の入口で散々騒いで帰つていつた後、一人の青年が犬を抱えながら森の入口の近くに立つた。

「…………アルフレッドさんとアーサーさんが来たようですね」

「わふっ」

青年 菊の言葉に腕の中のぱちくんが答える。

菊は少し困ったように笑つた。

「相変わらず騒がしい方達ですね。声が私の家にまで聞こえましたよ」

「わふう…………」

「まあ…………」

菊が振り向いて森の中を見た。ただ木々が風で揺れる音だけが聞こえる。

「おかげでこの森に住み着いていた弱い邪鬼が逃げてくれましたけどね」

「わふうつーー。」

菊がそう言つた時、突然ぱちくんが地面に降りて森の入口に向かつて吠えはじめた。

「ぱちくん？」

「相変わらずぱちは気配を感じるのは得意あるな。さすが菊の犬ある」

「……。」

森の入口に一人の青年が歩いて来た。

その青年は長い髪を一つに結い、チャイナ服を身に纏っていた。

「…………王耀ちゃん…………」

「久しいぶつあるな、菊」

耀^{ヤオ}は菊を見て、微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2082x/>

【APH】パズル

2012年1月8日21時45分発行